次で里馬市に於けるインカ會社の事務長となり、其後數回に三千餘人の日本移民を輸送した。

明治四十年にはアンデス山中アマゾン河沿岸に入り、專ら護謨採集事業を監督し、マルドナード河港外數箇所に日本村を拓き、米作を奬勵して移民の食料充實を計り、又日用品供給の途を講ずる等一通りでなかつたので、移民は勿論官憲や

▽土民間にも　非常な尊敬を受け、日本移民の地歩を確實にした。獨逸と開戰以來護謨の輸入が禁止せられ、インカ會社は事業を中止したので、護謨林にあつた日本移民は活路を失ひ離散するの憂目に遭遇した。恁くと見た氏は秘露政府から廣大な山林地を借入れて開墾を奬勵し、又た聖母河に日本風の舟筏を浮べて運輸の業を占有せしむる等、日本人發展策に腐心してゐた。大正五年一月から母利比亞國内地に入り、未だ曾て文明人の足跡を印したことのない深林地帶を跋渉したり、又は手づから舟筏を造つて聖母河を下つたり、常に猛獸鰐魚と戰ひあらゆる

▽危險を冒して　意としなかつた。次でマルドナード河港より東方七百哩の母利比亞國ラバッス州サンホセ部落に入り、大に部落民の尊敬を受け乍ら、同地に於て山鹽の製造、砂金の採收、珈琲の栽培等を試み好成績を得たので大に日本人を移民せんと計畫中、肋膜炎の爲に遂に

▽不歸の客　となつたのである。氏は英、西、土民語に通じ、南米開發に關する意見や探險紀行を西班牙語や英語で彼地發行の新聞雜誌に寄稿したこともあり、それ等の飜譯書類を今回里馬日本領事館から郵送して來たので、遺族は近く之を出版して南米開發に資すべく計畫してゐる。

遺品並に遺産に關する里馬日本領事館の書簡

大正八年四月一日

在里馬日本領事館印

東京府豐多摩郡代々幡町字代々木南山谷三百八番地

堀内良平殿

御令弟傳重氏の日記及記行等御出版の御目的を以て、傳重氏執筆に係る通信にしてアンデス時報に掲載せられたるもの有之候はゝ、大正五年一月以降の分送付方去る一月廿一日付貴簡御來意の趣了承、別紙の通り筆記又は切抜き御送付申上候條、御査收相成度候。

尙堀内義光氏より過日傳重氏遺品中に獨逸銀行の預金帳あり、之に依るときは久しき以前より取きものゝ樣認められ候得共、或は預金殘額の存するものあるやも難圖に付取調方依賴あり。當地同銀行に就き取調候處、同銀行には堀内傳重氏名義の預金無之も或はArequipa支店に存する引なやも難圖旨申し居候に付、目下同支店に照會中に有之候。右念の爲め回答旁併せて申進候也。

故人の詩作

甲州途上作

短簑衝雨度崎嶇　風捲雲烟路有無
一嶺僅終還一嶺　逢人幾處問前途

過御坂嶺

駐馬嶺頭開笑顏　芙蓉倒影湖色寒
風光奇絕眞如畫　看至千回不厭看

漫題舊作

問花尋柳付他人　古卷繙來燈影親
志業難成烏兎急　何辭萬苦與千辛

又

豈願區々衣錦榮　所希唯在千古名

單心報國腰間劍　好向那邊斬老鯨

又

蓬頭龜服一書生　講武修文報國情
他日黑龍江上夕　戎衣對月賦南征

詠松

風起時如奏玉笙　雪來天矯尙含榮
世人須學蒼髯叟　堅節千秋黛色清

近郊探梅

路作叉邊老圃家　勿從籬落認梅花
憶他曾在峽中日　探遍空山雨一簑

墨堤觀花

百尺長橋曲似弓　綺羅幾隊落波紅
管絃如湧人如織　渾在香雲暖雪中

題西郷南洲銅像

英略奇謀即維城　腹兮便々蓄忠誠
儼然銅像如生色　赫々應留萬古名

不許複製

聖母河畔の十六年

大正十五年五月廿五日印刷
大正十五年六月一日發行

定價金二圓五十錢

編纂者　堀内良平
東京府市外代々木三〇八番地
發行者　堀内良平
東京市芝區西久保巴町三一番地
印刷者　酒井巖
東京市芝區西久保巴町三一番地
發行所　酒井印刷所
電話青山三四五九番

終